父親の育児の現状と意識の変化に関する研究

小﨑　恭弘

はじめに

社会の少子化の進行は、子どもが減るという一事象にとどまらず、わが国の社会保障や経済体制にも大きく影響を与え、その動向が注目を浴びている。そのような中で社会全体で子どもをよりよく産み、育てる方策が採られている。それが少子化対策や次世代育成支援である。そのような動きの中で、従来子育ての対象とされてこなかった父親にも、近年子育ての主体としての活躍が期待されるようになった。本研究ではその点に鑑み、現代社会における父親の育児についての意識調査を行う。

1．研究の目的

具体的に以下の二点を行う。

①一般市民の意識アンケートを行い現在の父親やそれを取り巻く状況の把握を行う。

②父親を支援する雑誌や団体にインタヴューを行い社会的な動向について理解を行う。

これらより現代社会における父親を取り巻く状況について理解を深め、その状況を作り出している社会的要因について考察を行う。

2．研究の方法

アンケートは関西圏の子育て関係の講演会等にこられた参加者に配布回収。4箇所で総数200部配布。142部の回収(回収率71.0%)。質問項目は、基本的属性(9項目)。・父親に対する育児意識・父親の育児阻害要因・父親の育児参加内容・父親の育児姿勢(19項目)と自由記述。

インタヴューは、父親の育児について支援を行っている団体へのインタヴューを行う。インタヴューは「NPO法人関西子ども文化協会」「NPO法人ファザーリング・ジャパン」「日経キッズプラス編集」「講談社　げんき編集部」「小学館　めばえ編集部」である。インタヴューはそれぞれ1時間から2時間程度。期間は2006年7月から2007年2月まで。

3．研究結果

アンケートについての基本的属性は・男女比　男性69名・女性73名・年齢　平均34.80歳・子ども数　1.65人・家族構成人数3.88人であった。

・父親に対する育児意識　子ども・母親・父親・社会にとって意義があるととらえられている。

・父親の育児阻害要因　父親の仕事が最も育児参加を阻害しており、意識・社会制度・知識と続く

・父親の育児姿勢　子どもの看護休暇や育児休業の取得など、高い意識が求められている

・父親の育児参加内容　多くの父親が4時間以上のかかわりを持っており積極的に参加している

インタヴューでは、各団体や雑誌が父親についての特集を組んだり、また父親自体をその主要購買層と位置付けている。これらの背景としてインタヴューからあきらかになった事は

①書籍自体が飽和状態であり、新たなる購買層を摸索している

②父親の育児が社会的な関心事項として注目を浴びている

③少子化を背景に子育てが企業・行政・市民など様々なかかわりの可能性を秘めている

④親の不安解消や子どもの将来設計などの手がかりを求めている

などがあきらかになった。社会的なニーズに基づき書籍は発刊され、購買層を獲得していく事になる。その過程は社会の現状をダイレクトに映し出すものであり、今後のこの流れはより活発に加速される。